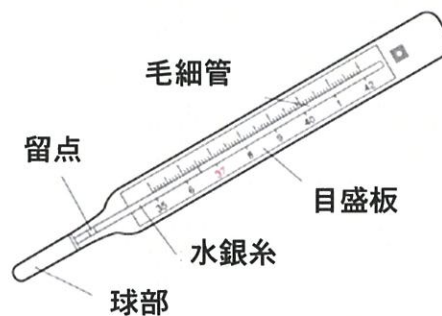
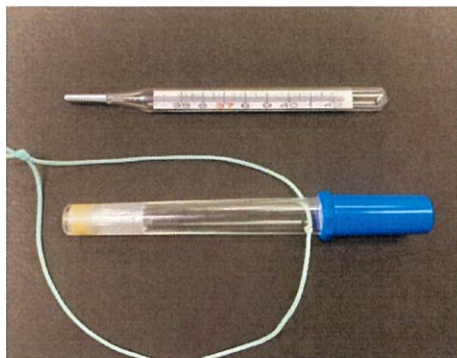


水銀体温計



体温計は1609年に数量的に体温を把握しようとしてイタリアで考案された。この体温計は、蛇行するガラス管の一方を球型に加工し、もう一方を水入りの容器に入れる。ガラス球を口を含むことで内部の空気が膨張し管内の水位を押し下げる度合いで体温を測定した。

1714年にドイツの物理学者ファーレンハイトが皮袋で濾した水銀を使った華氏温度計を發明し、これを使用して体温は華氏96度（約35.6℃）であることを発見した。

日本初のガラス製水銀体温計は1883年（明治16年）に山口県防府市の薬局店主柏木幸助によって作られ、1920年頃の第一次世界大戦をきっかけに、国産化が進んだとされている。

水銀体温計による測定は、体温によって水銀が膨張することによって、水銀柱が上昇するため測定できる。水銀体温計には留点と呼ばれる水銀逆流を防ぐ構造が作られているため、測定した部位

から離しても最高温度の測定が可能である。体温を測定した後は、必ず振って水銀を球部に戻してから使用する必要がある。

2009年3月で社団法人日本計量機器工業連合加盟企業での水銀体温計の生産は終了している（ほぼ国産は終了）。体温計中の水銀量は毛細管の径によって内容量にバラツキがあるが、1本あたり0.75gと推測されており、2006年度の国内生産量が63万8千本、2007年度が42万5千本となっているため水銀使用重量は479 kg、319 kgとなっている。出荷先は約57%が薬局及びドラッグストア、33%が病院、10%がその他となっていた。水銀体温計は水銀使用製品産業廃棄物に指定されており2020年末に、製造が禁止される。

出典（生産量）：薬事工業生産動態統計年報（厚生労働省）



なんで体温計って42℃までしか表示無いのかな？

体温が42℃以上になる場合は生命の危機とされています。そのため42℃以上の正確な測定は意味がないとされているのです。同じ理由で電子体温計も表示されません。

